



Vol.51

机の上の小さな変革



もしもの過剰

こんにちは、菅俊一です。今回は、みなさんが普段持ち歩いているモノについて見直しながら、モノの役割や機能について考えていきたいと思います。

まずは、普段持ち歩いているカバンの中を見てみてください。いつの間にか、いろいろなモノが入ってしまっているのではないかと思います。それらを丁寧に見直して、ゴミや複数入っているモノは除いて、可能な限り厳選してモノを減らしてみてもらいたいです。



いざモノを減らそうとすると、たいいていの人は何かすでにカバンに入っているモノで2つ以上の機能を担えないかを考えたり、そもそも本当にそれを「いつも」持ち歩く必要があるのかといったことを判断したりするのではないのでしょうか。

たとえば私の場合は、カバンの中についつい大量のペンを入れてしまっているのですが、結局は同時に2本以上使うことはないで、一番使用頻度が高い黒のボールペンだけを持っていれば済むはずです。

そもそもなぜ多くのモノを持ち歩いているのかについて改めて考えてみると、「もしかしたら外出先で〇〇が必要になるかもしれない」という過剰な想像によってモノがどんどん増えてしまっているように思います。今回

の持ち物の厳選は、前もって何かの予防線を張ってしまう思考から抜け出し、明確な優先順位を付けていく作業であるとも言えます。

先ほどのペンの話で言えば、「もし外出中にインクが切れてしまったらどうしよう」という明らかに先回りして不安になっている気持ちから、いろいろペンを持ち歩いてしまっていたわけですが、ボールペンなんてコンビニエンスストアに行けばいつでも入手できますし、仮に出先でインクが切れたとしても、深刻な問題にはならないはずです。

予防線が奪うもの

このように考えてみると、私たちは多くのことについて、かなり前もって「もしも」の事態について過剰に対応してしまっていることがあります。もちろん、防災など事前に備えておくことが必要な分野はあるのですが、その一方で、未知の事態に対して準備をし過ぎてしまうことで、臨機応変に状況に対応していく知性をはたらせる余地を、自分自身で奪ってしまっている可能性もあります。普段の持ち物を見直すという単純なことからも、私たちの知性のはたらかせ方について考えてみるができます。



PROFILE 菅 俊一 (SYUNICHI SUGE)

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、様々なメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンデコノミクス』など。